昭和30年度春山報告

——北鎌尾根末端より槍ケ岳まで——

(一) まえがき

先づ我々が如何なる理由により、又如何なる観点から、ポーラー・メソッドを採用し、その試練場に槍ケ岳北鎌尾根末端より奥穂高攻撃を選んだのである。戦後再発足した我山岳部も、近代的登山として特筆されるであろう輝かしい成果を収めたこの時期にあつて、さゝやかな歩みを早六年間続けて来た。混迷期からの山岳部として脱皮、回復、ポーラー・メソッドの採用。そしてその発展を志して来た我々は30年度を迎えるに当り、今迄の歩みに一段階を劃し、成果を集約し、更に将来の立体的発展への基盤とせんとして、この登頂を目論んだのである。

(二) 計画と準備

次にこの計画の進行過程及び遂行に当っての準備を述べよう。当計画は30年5月、我々の部員総会に於て、全員一致北鎌尾根より奥穂高へのポーラー・システムによる登頂を決定した。しかしこの計画を遂行するに際し、我々の部は戦災の傷恨をまだ多くの点に於て残してゐる。その復興が我々の北鎌への第一歩であると考え、先輩の方々に御無理願う事にした。そこで神戸大学山岳会から復興資金援助が確約され、我々は一路北鎌へと邁進すれば良い事になつた。

そこで我々は春山を目標にした一年間の計画を組み、二回に亘つて偵察がなされ、又三度の荷上げにより、残るは春の我々の北鎌尾根より奥穂への登頂を待つばかりとなり、いよいよ3月、出発の日となつた。しかしその時、我々の全計画を遂行するには困難な一大障害が起つた。それは登頂隊員を含む四名の主力メムバーが、病気、事故、骨折、等により、当計画に参加不可能と云う事態が起つた。やむを得ず我々は我々の攻撃範囲を北穂とし、それ以上の計画変更をする事なく、計画の遂行に移った。

(三) Member

先発隊	丹波　洋	下津　実		
本隊	川畑　実	岸本卯三郎	高田　誠	前田精三
	北　健一	佐藤元美	水口一義	佐藤貞雄
	伊吹友造			
後発隊	高木(部長)	梶原(先輩)	森田	桑田公明
	東郷賢治	林　市雄		
部長	高木正孝・隊長	川畑(C.L)・Attack	岸本(S.L)	下津
総務	高田(M)	装備 北、東郷・食糧	丹波、前田	
記録	下津			

滝谷は黒々して第一尾根の姿や、ドームもはつきり見える。すつかり根がはえて1時15分出発、頂上からフイツクスをはりながら下りる。途中からアンザイレンして三ピツチでおりる。その頃から風が強くなり冷い粉雪を吹き上げ目に痛い。取付きから又バンドにクラストした斜面を駆足でCⅡへと帰る。」以上の様にして槍迄の登路は開拓された。CⅠの高木部長、前田、北はCⅡへ荷上げをし、高田、丹波がCⅡに入る。一方BCの川畑、水口、東郷がCⅠに入り、桑田、林が荷上げする。佐藤(貞)はテントに残る。

29日。雪、キヤムプは全て沈澱する。川口氏が第五発電所迄入山する。

30日。曇後雪、CⅡは沈澱、CⅠの川畑、東郷、高木部長、前田、北は出発するも雪混りの雨の為引き返す。BCの桑田、林がCⅠ迄荷上げをし、水口をともなつてBCに下る。

31日。曇、CⅡは沈澱、CⅠの高木部長、前田がCⅡ入りするのを川畑、北が天狗の腰掛迄サポートする。BCの桑田、林がCⅠに来て、林がCⅠに入り、桑田、東郷がBCに下る。

4月1日。雪、CⅠ、CⅡ沈澱。BCの桑田、東郷が川口氏と共にCⅠに来て、川口氏CⅠに入る。桑田、東郷は川畑と共にBCに下る。

2日。晴、CⅡの高木部長、岸本、丹波、前田は撤収を決定し、槍の肩迄フイツクスザイルの取りはずしに向い、槍の取付き迄行くも、雪の状態悪く引き返す。CⅠの川口氏、北はCⅡに向うも独標の取付きで高田、下津から撤収を聞き、撤収のサポートをする。BCの川畑、東郷はCⅠに来て、東郷CⅠに入り、川畑、桑田と共に下山の為BCに下る。

3日。晴後曇、CⅡの高木部長、岸本、丹波、前田は撤収し、CⅠの高田、下津が撤收のサポートをする。北、東郷BCに下る。BCの川畑は、桑田下山する。

(五) 遭難經過報告

4月4日、朝から小雪がちらついていた。CⅠを撤収する事にして各自七貫程度の荷を整えた。隊長はリーダー岸本、高田、丹波、前田、下津、林それに高木部長。CⅠを11時40分に出発する。十三峯手前でサポートの北、東郷に出合う。かなり高温で雪は比較的湿雪、30日の雨で出来た氷の上に十糎から十五糎の新雪がのつており、雪の状態は悪い。十四峯を越えて下りにかかる。トップ下津、以下林、高田、丹波、前田、部長、岸本の順に続く。十四峯直下、長さ三〇米、傾斜三〇度程度の急斜面にかかり十五米程下つた所で林スリップ、樺の木にて十米程落ちた後止る。高田これを救助せんとしてスリップ、同じく林の横の樺の木にて止まる。大変雪の状態悪い。

斜面を二〇米以上下つた所で続いて下津スリップ。五米程落ちた後ルンゼの方向に急角度に左に回り滑つて行く。ピツケルがきかない模様。三〇米程落ちた点で雪塊(高さ一米五〇以

上）を上げ皆の視界から消え去つた。午後2時頃である。直ちに高田、岸本、丹波の三名、ザイル二本を持つて後をつける。途中より六〇米のアツプザイレンをし、やや広いルンゼに出る。この辺にて折れた木に下津の帽子がひつかかつているのを発見、つぎにクラツカー、ザイル、ゴーグル、マフラー等を発見、やがてルンゼは、ゴルジュ状になる。その下端クレバスに下津の両足を発見。滑落地点より五百米～六百米、天丈沢迄後百五十米の地点である。頭部に打撲傷を負つた模様。脈博、心臓の鼓動、瞳孔反射既になく午後3時である。とにかく天丈沢迄降ろし、高田がＢＣへ連絡に下る。遺体を降ろした地点より二分にてＢＣに到着。未だ本隊が帰着してないので、寝袋を持つて上り遺体を入れる。再び高田続いて丹波をＢＣへ連絡に降ろす。4時頃本隊ＢＣに帰着、協議の上高田、丹波を連絡に湯俣へ降ろす事にした。

午後6時頃ＢＣ上方に遺体安置。

4月5日、晴。午後連絡により小宮山氏が遠山林平氏他二名の人夫をつれて登つて来られた。早速搬出作業にうつり、シユラフの上からポンチヨウでくるみ、タンネをソリの代りに敷いて引つぱつて行く事にする。千天出合下流の徒渉点はロープウエイをつくつて通過。4時に作業を終りＢＣに帰える。岸本湯俣へ。川畑、桑田松本より湯俣に。下山途中の川口先輩は連絡の為神戸へ直行。

4月6日、晴。部長遺族面会の為葛へ。搬出は中東沢出合より少し下流の地点迄。全員湯俣帰着。ＯＢ森、坪井、保坂、森田、部員武部他二名、学校より酒井及び芳賀氏、及び遺族大町着。森先輩他六名湯俣に直行。

4月7日、晴後曇。遺体搬出作業終了、１０時３０分湯俣に安置。部長、警察の長沼氏及び営林署の山城氏湯俣着。検死終了。ＢＣ荷下げ四名。川口ＯＢ他二名湯俣着。

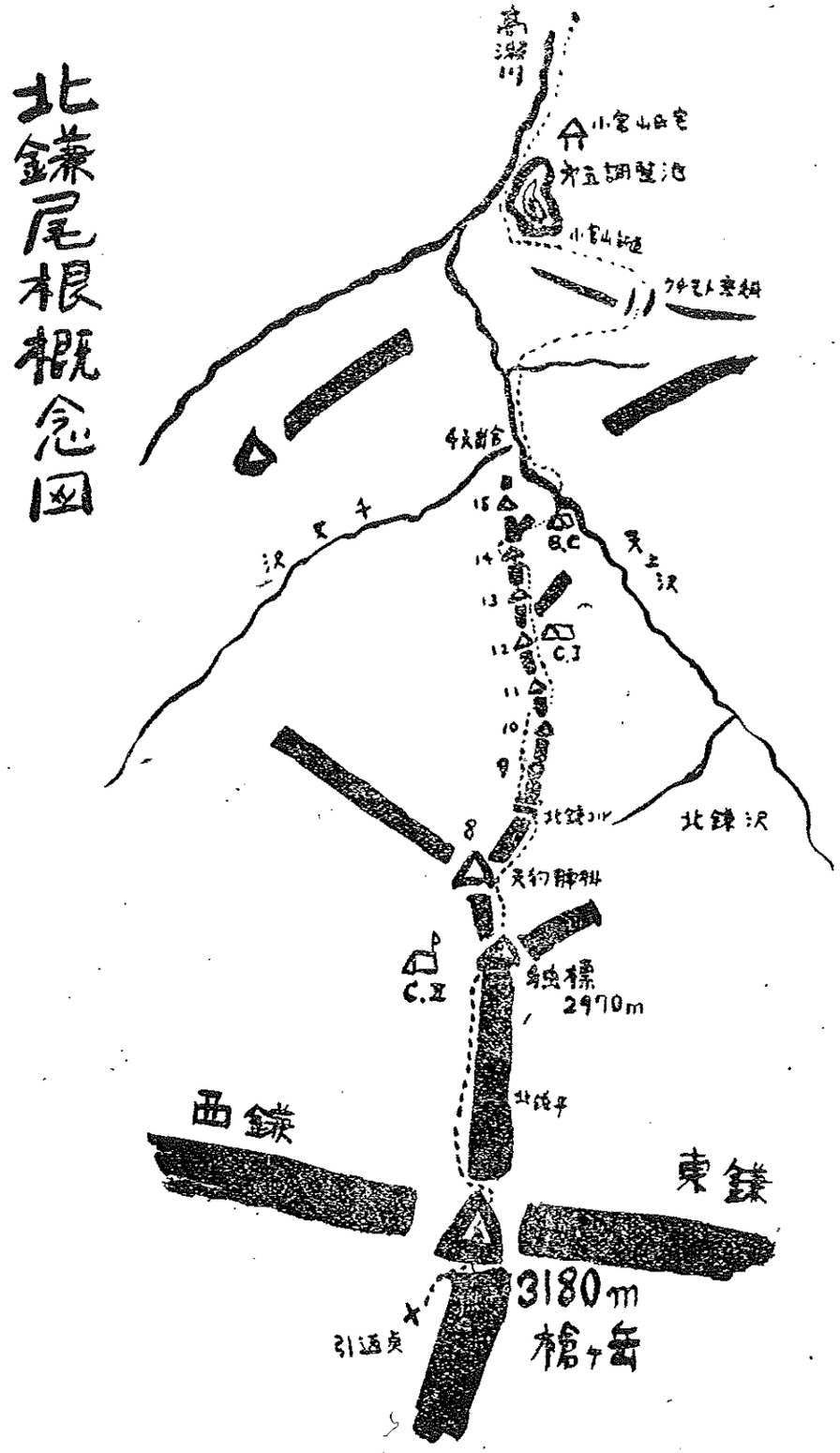
4月8日、曇後雨。茶毘、8時５０分点火、5時３０分骨上げ。ＢＣ荷下げ五名。仲林他三名湯俣着。太田先輩葛着。

4月9日、部長他六名下山。葛にて遺族に遺骨をお渡しする。残留部員ＢＣ撤収。

4月10日、湯俣撤収。

（六）む　す　び

我々の当計画は遂にこの様な大きい犠牲をもつて終つたのである。しかし我々は彼のこのあまりにも悲しく、又大きく尊い犠牲を無にする事なく、一層の精進を積みたいものである。

私はここに悲しみをもつて筆を置く事に致します。下津君、北鎌尾根に安らかに眠りあれ。

（北　　健　一・記）